

「はじらい」の考察

堀井 妙泉

今年三月に入ってから吹雪の日が多かった。今日は桃の節句、一對の雛を飾っただけの雛祭りだが、幾つになってもほのぼのとした感慨に包まれる。窓を打つ風の音を聞きながら、遠い昔友人の家に招かれた時のことを思い出していた。白酒がないので、これを飲みましよう、綺麗なガラスの瓶に入った白い液体を友人が台所から持ってきた。歌いながら楽しく飲んでいるうちに朦朧となり、お雛様の前で二人共引っ繰り返り大騒ぎになった。

あとで聞くとよれば、大人用の濁酒だったそうな。雪明りする窓辺で、あの日の少女の真っ赤な耳のような桃の花を活けながら、今迄に幾度となく重ねてきた「恥」を思い、忸怩たる思いを噛みしめている。

戦中戦後の厳しい時代を乗り越えて、よくぞ今迄無事に生き長らえて来れたとつくづく思う。

生み落とされて自分が何者であるかもわからず、無自覚に生きてきた年月より、禅に入門して見性させて頂き、真実のわたくしを発見し、白覚して生きてきた年月の方が少しばかり長くなったが、大宇宙の空間や永劫の時間から見たら、渺たる一瞬でしかないのであろう。

限りある人間の一生を思うと、いつの間にか終盤に近づいているけれど、私にとってはこの後半の年月は一日一日が新しく、感謝の日々である。

お陰様で趣味として続けてきた短歌や、禅の修行を通して、人生の

指針として仰ぐ師や、友人との出会いがあり、数知れぬ教訓や刺激を頂き、また素晴らしい漢詩や短歌にも出会った幸せをしみじみと思う。「出会い」というのも不思議なもので、こちらが求めていなければ素通りしてしまう。

「新墾」に入社して間もなくの頃、全国大会があり初めて参加した時のことである。班別歌会より選出された問題作品が、全体歌会の会場でディスカッションされるといので、心なしか上気しながら会場に向かった。主宰の小田観蛸先生のご挨拶があり「みなさん、恥をかきなさい、恥をかくことで人は育つのです。」という一言が特に印象に残っていた。その時は深い意味も分からず額面通りに受け取り、恥ずかしがって発言する人が少ないので、会を盛り上げるために激励して下さったのだと理解していたが、日々の行動や内面を反省してみれば、恥を重ねていることに気づき、年を経てようやく観蛸先生の仰った深い意味が解って来たように思う。生きるということは恥を重ねることであり、その人なりに少しずつでも成長していくことである。

「恥」という字を辞典で調べてみると、心と耳の形から成り立っており、自らの心に感じて思わず耳を赤らめること、と教えている。恥も文字の使い方によって微妙に違って興味ぶかい。

恥じる 自分の欠点、過失や、思うように出来なかったことを恥ずかしく思う。

羞じる はずらう、間がわるい、教養のなさを羞じる。

愧じる 自分の見苦しい行い、醜さをはずかしく思う、取り乱したことを愧じる、慚愧に堪えない。

恥辱 大勢の前ではずかしめを受ける。

識羞 自分の未熟さ、いたらなさを深く反省し謙虚になる自戒の語でもあるが、いまひとつは、倫理道德辺の事に関するものではなく、仏祖の仏祖たる真髓を表白した境涯の高い一語とある。

五つあげた「恥じる」のなかで、耳慣れない「識羞」について、少し言葉を添えたいと思う。私が四十年ほど師事していた禅の老師が、よくご提唱で仰っておられたが、師家（老師のこと）というものは、お節介なものであり、自分が迷っていることさえ気がつかず、太平楽をきめこんでいる大衆を見るに見かねて「さあ悟れ」「もっと悟れ」と働きかけずにはおられないものである。「雪を担うて井を填める」にも似た「労して功無い」営みに、お気の毒にも汗水たらして骨折っているのが、仏祖といわれる方々の生きざまである。お節介な生きざまを振り返り、思わず「笑うに堪えたり、悲しむに堪えたり」で、まことにお恥ずかしいことだと、述懐されたことが年々に身に沁みってくる。

この深い慈愛の心に裏打ちされている羞しさが「識羞」ということである。禅の修行を続けていると恥をかくことが多い。見当違いの見解（公案の答）を胸に抱き、自信满满と参禅し見ごとに否定の鈴を振られて帰ること幾千回、それでも怯まず師家より授かった公案に全力傾注して三昧になり、工夫に工夫を重ねるのである。時には難透難解の公案につまずき、答の見つからない時、からまわりしている自分の未熟さに恥ずかしさがこみあげ、顔の赤らむ思いをすることが度々であるが、その恥ずかしさも忘れ果て、更なる工夫を重ね、真正の見解に辿りつくのである。それは人生の大問題を解決することであり、人から教わるものでなく、自らの努力で体得するものであるから、それを得た時の喜びは言葉では言い表すことが出来ないものである。

禅の修行は、苦しみの分だけ喜びも大きく、何よりも生きる力が漲ってくることを実感している。

短歌をよむことも「恥じる」ことに繋がっている。

「思ひうちにあれば色ほかにあらはる」と、「熊野」の一節にもあるように、内なる思いを外なる色（形あるもの）に映し出す微妙な短詩型文学である。

なにもわざわざ人様に見せなくともよい心情を、言語にして公表す

ることもなかるうに、と思うこともあったが長い年月を短歌に係わって来だのは、今、生きていることの確認であり、詠うことによって心が浄化され、新しい自分に出会うことが出来るからである。

さて、「恥らい」をテーマにした歌として、長い間心にあたためていた次の作品を鑑賞してみたい。

おお朝の光の束が貫ける水、どのように生きても恥

佐佐本幸綱『直立せよ一行の詩』

水は、あるがままの自在性を持ち、透明で朝の光を受けて燦燦と輝いている。その一杯の水が身心の渴きを癒やし、生命の浄化、再生をもたらしてくれる。大白然の生命と繋がっている水の無心の美しさと、無限の力に思わず感歎の声を発している。それに反して、人間とは何か？の問いがあり、いろいろな角度から思索し、遂には生きることは「恥」に繋がるという。過剰な言葉はなく、余情の部分に哲学というより宗教的な、生命の源を照射している歌として味わってみた。

羞しさはこころのはじめ水こえて来たる子の眼のなかの冬蝶

伊藤一彦『月語抄』

人間の精神作用のもとになる「こころ」を総体的に見ると、知識、感情、意思などということだが、ここでは、無垢なるものの、心の作用のはじまりは、「羞しさ」であると捉えている。水を越えてきた冬蝶のひたすらな命の輝き、それを映し出す子の澄んだ瞳、無作無心で一片の計らいもない、命と命の呼応する生のゆらぎを切り取っている。

「羞しさはこころのはじめ」というフレーズが好きで、ながい間心にとどめていた作品である。

「はじらい」の芸術として、マックス・ピカー（ル）トという外国人が、東洋の墨絵について次のようなことを言っている。簡素単純に描かれた花ある一枝の梅は、そこに描かれていない梅の木の幹につながっている。大地の根につながっている。いや、春の全雰囲気につながっている。ひとは描かれぬままに、描かれている余白に、筆を加えようとは、さらさら思うまい。

描かれた部分は「はじらい」でふるえている。この「はじらい」が東洋芸術の特質である。ということであるが、東洋人の心の奥にある慎しさや、謙虚さが「はじらい」となって表れるのではないかと思う。

短歌にしても同様のことは言うまでもないが、詠もうとする対象にむかっては、心を十分に働かせて凝視し、表現するときは簡素単純にして多くを言わず、表れていない部分から、立ちのぼってくる作者の香りが大切のように思う。

文芸の主体になるものは「心」であり「感性」であり、どちらもたゆまず磨くことである。

中国の五経の一つである易経には、感という文字の下に心を書かないで「咸」と読ませている。これは咸の「かん」には心（意識）も入りこむすきがないからである。

人間の心を磨くことも、文芸を磨くことも、これでよいということはない。終の日まで進歩を信じて精進したいと念っている。

（本稿は、歌誌『英』^{はな}57号から転載させていただきました。）

著者プロフィール



堀井妙泉（本名 / 美鶴）

昭和3年、函館市生まれ。歌人。新墾賞、北海道歌人会賞、北海道新聞短歌賞、日本歌人クラブ北海道ブロック賞受賞。平成2年より同人歌誌『英』編集発行人を務める。昭和44年、人間禅芳賀洞然老師に入門。現在、人間禅主幹布教師。庵号 / 蓮昌庵。
れんしやう